



定期的に往診している八十七歳の男性のAさんは、奥さんと二人暮らしをしています。奥さんは両眼を失明し、寝たきりの状態です。Aさん自身も肺気腫や足の血流障害のため、引きずる足で家事や介護をしています。

充実した日々を

いつもさっぱりと剪(せん)定された庭の木。掃き清められた玄関。往診に伺うと、Aさんがしっかりと家事をしている様子うかがえます。こうした家事とつきっきりの介護は、体力的にも精神的にも負担の大きいものと思われるのですが、Aさんはいつもニコニコと穏やかな表情で、日々の暮らしを送って

生きる姿勢から多く学ぶ

いました。ある日、奥さんの病状が悪化

したため、往診で治療したとき

二万人の部隊で南方に出かけ、

「私らは戦争中、二百人しか戻らなかつた。マリアになって死にかけたところを現地の一般人に助けられ、そのまま終戦を迎えた」。Aさんから、思いがけずこんな話を聞きました。奥さんの病状を見ていて、かつて生死の境をさまよったことを思い出したのでしよう。

急ぎよ車いすを用意し、酸素ボンベを抱えて一緒に村役場の投票場へ行きました。Bさんは投票を終えると、あらかじめ用意していた村長さんへの手紙を取り出し、職員に手渡しました。Bさんはそのまま入院し、翌日に亡くなりました。生きている限り自分で考え、社会に責任を果たした姿に感銘を受けた出来事でした。

さえき 佐伯 けいこ 圭吾 22期生、1999年卒



鎧岳のふもとにある診療所 (左下)

曾爾村国民健康保険診療所

【私の勤務地】曾爾村は人口約2000人の過疎の村。曾爾高原、香落溪、屏風岩など美しい景観と温泉があり、観光客が訪れている。曾爾村国民健康保険診療所は、医師1人、歯科医師1人、看護師2人、歯科衛生士1人、事務員3人の無床診療所。

社会への責任感

八十七歳の男性のBさんは前立腺の進行がんのため自宅で療養していました。血尿や両足の浮腫など病状が進行しても冷静に理解し、できる限り家で養生

私は、患者さんの伴走者としての医療を行う中で、その生きる姿勢から多くを学んでいます。(次回予定は群馬県)